

---

# さよなら超能力者

百時 紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さよなら超能力者

### 【Nコード】

N4232R

### 【作者名】

百時 紅

### 【あらすじ】

世界の超能力者、または一般的にありえない力をもつ者が消えている…  
束切レイカの親友、赤野真悟も消えてしまい、レイカは真悟の行方を知ろうと奮闘する。

？

夕日が、とある教室にさしこんでいた。

ありきたりな教室で向かいあっているのは、この学校の制服をきた男女。

「くそっ！ 一歩おそかったか！！」

「ごめんね。赤野くん」

憤慨する男子生徒とクスクスとほほ笑む女子生徒。

男子生徒はどこにでもいる高校生で、女子生徒は童顔で長い黒髪をなびかせていた。

「…おれはどうなるんだ。」

赤野くん、とよばれた男子生徒は女子生徒に問いかけた。

「もちろん。アルカディアにきてもらうの。そこから先は向こうに着いたらわかるわ。」

女子生徒はまたクスクスとほほ笑んだ。

「…レイカにはやく伝えるべきだったか!!」

「ああ。大丈夫よ。あなたのお友達の名前はリストの最後のほうだから。」

「どっちにしろ、あいつも連れてかれるんだろ…。」

「そうね。だから、」

女子生徒は一步步赤野クンといった男子生徒に近づいた。

「今は、自分の心配をしたらどうかしら？」

「くそっ!!」

男子生徒は悪態をついた。

「さよなら、超能力者リスト? 03 赤野真悟。」

ヒュンッ

ふと風をきる音がして、つぎの瞬間には一人はいなかった。

夕日はまだ教室をさしていた。

？

さて今日はどんな風にくるだろうか…

なにもはいつてなさそうな鞆を手に、束切レイカは廊下を歩いていた。

たまには肘で顔面を突くとか、いや、ナチュラルにふつうのパンチでもいいだろう。

物騒なことを考えていた。

ガラッ

1 - B とかかれた教室のドアをあけてレイカは身構えた。

…なにもこない。

「…アレ?？」

1 - B、教室のすみ。

「なあ友哉。今日は珍しく真悟いねえのか？」

「らしい。」

「ふーん……」

「……」

「……」

「バカでも風邪ひくんだな。」

「らしい。」

「……」

窓からは気持ちのいい風と日差しがはいつていた。

レイカは岸草友哉としゃべっていた。

というか一方的につぶやいていた。

なんだ、珍しい。

珍しい、という言葉をもう一度心のなかで言った。

いつもの朝。

かならず俺が教室を開けると真悟があいさつをする。

で、しつこい。

だから、殴る。

そんな感じで毎日が成り立っていた。

キーンコーン……

チャイムが鳴り響いて、友哉に軽く手をふり席に着いた。

「えー、これで冬休みにはいるわけですがあー、なるべく気をーぬかないようにいー。」

風邪…ねえ。

あいつが病気で休んだのをみたことがない。



といっても中学のころからだが。

ボーッと外を眺めた。

ゴスツツ

額に強烈な痛みがはしった。

「イッテエ!!」

「つーかーぎーりー…。いまは自然観察じゃなくて先生の話の聞こうなあ。」

さっきから眠くなりそうな声でしゃべっていた担任がお約束のように白いチョークを投げた。

すごいコントロール力である。

クスクスと女子の笑い声が上がった。

「とーもやー。かえろーぜー。」

「…おまえ、荷物それだけなのか？」

「は？」

「…まさか明日から冬休みだってこときいてねえのか？」

「へ？」

はあ…

友哉はこれ見よがしにため息をついた。

「バカな友人をもつと苦労する…」

「んだとコラァー!!」

窓からは気持ちのいい風と日差しがはいていた。

？

(11:30。赤野邸集合。必ず来い)

「ああん?？」

レイカは寝起きでボサボサの髪をかきむしりながら顔を歪ませた。

冬休みにはいつてから4日が経っていた。

そして今日は25日。クリスマスである。

恋人もなにもいないレイカは今年もさびしく家族でぱーてぃーか、  
と思っていた。

そして今。

友哉からの簡潔すぎるメールにくびをかしげた。

真悟になにかあったのか…？

それとも3人でクリスマスパーティーか？

お調子者の真悟がいるならぜったいに後者だな、  
と思いながらいそ

いそと身支度をはじめた。

「しょーがねえ。いつてやるか。」

もちろん。

母親が少し前に買ってきた今日ののためのクラッカーを1つ持つて。

もう心はクリスマスである。

パアアアーーーーン！！

「メルイークリスマス！！」

派手なクラッカーの音でチャイムもならずレイカは真悟の家の玄関を開けた。

たぶん相当近所迷惑だろう。

だが、のりにのったレイカはまったく気にしていなかった。

ガラスとリビングの戸があいた。

おっ、ノリノリの真悟が、クラッカーをこっちに向けて放つだろうとすこしレイカは身構えた。

だが。

「なにやってんの、お前。」

浴びせられたの冷え冷えとした友哉の声だった。

「……ん？」

友哉の顔は、クリスマスパーティーどころではない、という感じの暗い顔だった。

「真悟が帰ってきてないらしい。」

「はあ？」

先ほどのテンションも落ち着いたレイカはうつむいている二人の子どもの顔をみた。

「五日前に学校に行ったきり、かえってきてない…」

真悟によく似た顔の男の子はたしか、弟の赤野加波で中2だとか。

もうひとりの女の子は、妹の赤野瑠香、小1。

「どっか、旅行にいったんじゃないの？」

「…いや、たぶんそれはない。」

友哉が答えた。

「なんで。」

「あいつは単純だから旅行いくならいくで俺達に自慢するはずだ。」

「な、なるほど…」

真悟のことをよくわかってんなあ、と感心しながらうなずいた。

「加波兄ちゃん…真悟兄、帰ってくるよね？ 今日ね、くりすますなんだよ。」

「…大丈夫だ」

瑠香は加波の手を握った。

「…しょーがねえ。ひとつだけツテがあるんだ。そいつにあたってみる。」

「！ ありがとう。」

加波と瑠香の顔がパツと明るくなった。

「おう！ 任しとけ！！」

「…と、言ったのはいいが…大丈夫なのか？」

帰り道、友哉は聞いた。

「おう！ とりあえず姉キに聞いてみるよ。」

「…リンカさんか…」

「絶対みつかるはずだ！」





？

「3000円。」

目の前にさしだされた手にレイカは冷や汗をかいた。

「な、頼むってもうちつとまけてくれ。」

「じゃあ3000円」

「1円もまけてくれねえのな！」

「しょうがないね。2999円で手をうつたげる」

「イエーイ！ ってほんとに1円しかまけてくれねえんだ！」

レイカは友哉と別れてすぐ、自宅に行った。

束切リンカ。

レイカの高2の姉。

そして、彼女は人のオーラを読み取って追跡できるという超能力をもつ。

「な、頼むって。おまえの力が必要なんだ。」

「消しゴムしかもちあげられないあんたに頼まれたくない！」

「なんだとう！」

そして、レイカも超能力者である。

所謂、物体浮遊能力。

だがせいぜい消しゴムを持ち上げる程度。

だから言い返すことができない。

「……くそつ。今月の小遣いとぶけど……。まあいいや。30000円払うからとりあえず頼まれてくれ！」

「……しょーがないね。」

めずらしく必死なレイカをみてリンカはOKをだした。

だが元の値段にはかわらない。

「よっしゃー！」

「で、なにをしてほしいの？」

「それはだな、」

レイカはさきほどの話をリンカにした。

「なあるほどね…その真悟くんの居場所がしりたいわけか。」

「おう！」

「ところであんた。」

「？」

「あたしが人のオーラをみるにはその人が三日以内につかったモノがないとだめってこと、知ってる？」

「あ……」

？

「ど、どうしよう」

さきほどの自信もむなく、レイカはその場に崩れおちた。

「あーあ。なんていいわけするの？」

「……………」

レイカはついに黙りこくってしまった。

「……………」

見かねたリンカが声をかけた。

「ねえ、どうすんの？」

「…ひとつだけ、気になるヤツがいる。」

「はあ？」

「とりあえず、そいつん家行ってみる。」

「え、だれのところ??」

「雨村由梨」

雨村由梨。

レイカが彼女の家を知っているのは、以前真悟とこんな会話をしたからだっただけだ。

「なーレイカ、雨村由梨って知ってたか？」

中学2年のとき。

真悟と知り合って仲良くなったのは中1の半ばだった。

その真悟がこんなことを聞いてきた。

「アママラユリい？　だれだそれ。おまえナンパでもしたのか？」

冗談めかして言ったが、お調子者の真悟が真剣そうだったためまじめに聞くことにした。

「まだレイカと仲が良くなる前にだな俺の友達に形野圭太っつーやつがいたんだ。そいつも、まあ、軽いちょっと変わった能力を持ってるな、」

「え、ちよつとまで。おめえ、俺以外にもそーゆー能力もった知り合いいたのかよ？」

「まーな。圭太の能力もおまえと同じ、物体浮遊能力だ。」

「へえ〜。けっこういるもんなんだな。」

「でもあいつの場合はけっこう重いもんも浮遊させることができたんだぜ？」

「うるせーよ。…ん？　ちよつと待てよ。この学年にカタノケイタなんてやついたか？」

「そこなんだよ。圭太は中1の夏休み前に姿を消したんだ。」

「へ？」

「まるつきり、なんの跡も残さず。」

「なんだそれ？　親とかはどうなってんだよ」

「圭太に両親はいねえ。あいつの両親小学校のときに両方ともなくしてる。」

「けっこう壮絶だな…」

「ああ。だから、探す人もとくにいなかったんだ。」

「で、それがどうして、アナムラユリって女と関係あるんだよ。」

「圭太が消えたのがその雨村由梨が転校してきてからだったからだ。」

「……」

「なんらかの関係があるとみてもいいんじゃないか？」

「だけど…よく考えれば、雨村由梨なんて女も聞いた事ねえ…」

「そいつもすぐいなくなったからな。」

「ふーん。どうしようもねえってわけか…」

その後、二人が高校にあがり2年になったとき、二人はその雨村由梨と再会することになるのだった。

「なあるほどね……。」

「だからほぼ雨村がなにかを知っていることに変わりはない。」

「……わかった。あたしもついてたげる。」

「おう！」

「ところで、家は知ってんの？」

「……河取通りのへんってことぐらいは」

「……使えねー……」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4232r/>

---

さよなら超能力者

2011年10月6日19時50分発行